二　次の文章は、建斗が妹の里奈と母と三人で父の墓参りに来た場面で、里奈は父が人生をかけてつくりあげた〝花の森〟を見に行こうと母を誘うが、母はそれを拒んでいる。これを読んで、後の問いに答えなさい。

「①俺もだよ。俺も、母さんのこと、連れていきたい」

「健斗……」

　困ったような顔をした母と、俺の視線がまっすぐにぶつかった。

「俺……、母さんが、植樹の現場を見たくないっていう気持ち、分かるよ。だって、この人——」俺は、ちらりと質素な墓石を見て続けた。「俺たちを放っぽって、桜の植樹にａうつつを抜かしてさ、最後は家族を捨てた人だしね。俺だって、正直、完全には許せてないし、墓の前で言うのもナンだけど、しようもない人だなって思ってる。でも——、それでもさ、本当にすごいんだよ、あの丘は」

「…………」

「先週、里奈と来たときは満開でさ、めちゃくちゃたくさんの人たちが花見に集まってて、みんな嬉しそうに笑ってたんだよ。で、その人たちの笑顔を見てたらさ、なんか、俺、しみじみと、『親父、こんなことをしてたのか、マジですげえな——』って思って。だからさ、一度だけでいいから、母さんも見てあげてよ」

　そこまで言って、俺は深呼吸をした。

「でも、その桜も……、もう、散っちゃってるでしょ？」

　ア再び眉をハの字にした母は、俺の視線から逃げるように墓石を見下ろしながら言った。

「まあ、たぶんね。でもさ、葉桜だっていいじゃん。この葉っぱが全て花だったら——って、満開をイメージしただけで、感動すると思うからさ」

　切々と話した俺の台詞の尻尾を、里奈がつなぐ。

「桜が咲いてるかどうかじゃないの。とにかく、わたしは、お父さんが必死につくった〝花の森〟をお母さんに見せたいだけだから。お願い、お母さん」

　切実な目で、里奈は母を見た。

　ふわり。ふわり。

　コットンタッチの春風が、斜面を滑り降りてくる。

　②そして、その風が、穏やかな線香の香りを広げて、三人を淡く包み込んだ。すると、

「はあ……」

　深いため息をこぼした母が、根負けしたように頷いた。

「分かった。二人がそんなにいうなら——、ね」

　最後の「ね」を口にしたほんの一瞬だけ、母の視線は質素な墓石に向けられていた。

　墓地を後にした三人は〝花の森〟に向かった。

　イぽつり、ぽつり、と言葉を交わす里奈と母の背中をぼんやりと眺めながら、俺はひとり父の人生を憶っていた。

　その人生を、あえてひと言で表現するなら、それは「③罪滅ぼしの人生」となるのではないか？
　そもそも父は一流企業に勤めていたことで収入は安定していたし、幸せな家庭を持っていたし、趣味を充実させて休日も楽しんでいたわけで、はたから見たらｂ順風満帆と映ったはずだ。つまり、脇道になど逸れず、大きく張った帆に追い風を受けながら悠々と生きていくという〝常識的〟な選択肢もあったはずなのだ。もちろん、たとえ失声症になったとしても、すでに手にしている幸福をあえて自分から手放す必要などなかった。

　しかし父は、それらを手放した。安定も、帰る場所も、楽しみも、すべて。そして、自分の人生を狂わせた山奥の土地へと移り住み、こつこつと植樹を続けた。

　いったい、誰のために？

　土砂崩れで命や財産を失った人たちと、それによって心に傷を　Ⅰ　村人たちのためだろうか？

　だとしたら、どう考えても道理にっていない。

　そもそも父は犯罪者ではなかった。一ミリの「罪」さえも背負っていない真人間だったのだ。それなのに父は自らの人生を犠牲にして——、いや、家族三人の人生まで巻き添えにして、いらぬ「罪滅ぼし」をする人生を選択してしまった。

　もしも、父が「罪」を感じるべき相手がいるとするならば、それは、この村の人間などではなく、に捨て去った三人の家族だけのはずだ。母と、妹と、自分は、なんの　Ⅱ　にもかかわらず、長きにわたって苦しめられた〝被害者〟なのだから。

　道理に適わぬ選択をした父は、結果として、毎月、手紙と金銭を母に送ることで、家族三人に「罪滅ぼし」をし続け、同時に桑畑村で植樹や整体の仕事をすることで、村人たちにも「罪滅ぼし」をし続けていた。

　一ミリたりとも罪のない父が——だ。

　あれほど賢かった父が、こんなにも理不尽な人生の選択をするなんて——、やはり、どう考えても狂気の沙汰でしかない。

　しかし、その狂気が、いつしか〝花の森〟をつくり出し、そしていま村人たちをはじめとした、たくさんの人々を笑顔にしているのだ。しかも、おそらくは、この先、何十年にもわたって無数の笑顔を生み出し続けるのだろう。

　あらぬ罪を背負い、人々の笑顔の素をつくり出した——。

　そんな父の人生は、いったいどう評価されるべきなのだろう。

　あるいは、そもそも他者が評価などすべきではないのか？

　人生の価値は、手に入れた財産の量ではなく、味わった感情の質と量で決まるはずだ。

　だとしたら、父は——。

　そこで、ふと俺は、来る途中の車内での会話を思い出した。

　母から聞いた、亡くなった「自由人」の話だ。

自由気儘に生きたはずの人ですら、死ぬ間際になると「もっと自由に生きればよかった」と後悔の感情を口にする。だったら普通の人は、少しくらい周りに迷惑をかけてでも、自分の心に正直に生きるべきなのかも知れない。そんな話だった。

　もしも、そういう生き方を「良し」とするのであれば、父は後悔の無い人生を送ったことになるのだろうか？　それは評価されるべき人生だったということか？　一生のうちに味わった感情の質と量に、父は納得していたのか？

　分からない——。というか、正直に言えば、父が完全に納得できていたとは思えないし、思いたくもない。なにしろ父は、決して浅慮なタイプの人間ではなかったからだ。世界も、人生も、複雑に捉えていたはずだし、そういう人間であって欲しいという思いもある。

　分かっていることは、ひとつ。

　いまの俺自身の気持ちだ。

　もしも父が、後悔のない人生を送ったと納得していたとしても、俺は父の人生を手放しには評価しないし、したくない。

「ふう……」

　ひとり静かにｃ嘆息した俺は、いつのまにか腕を組んで歩いている母と妹の後ろ姿を見詰めた。

　だってさ、耐えてきたんだよ、母さんも、里奈も、俺だって——。

　胸裏でつぶやき、きゅっと唇に力を込めた。

　ウ気づけば、それまで俺たちの頭上を覆っていた樹々の枝が無くなり、周囲が明るくなっていた。そして、まっすぐだった細い道路が右に大きく曲がりはじめた。

「このカーブを曲がり終えたところだよ」

　里奈が母に言った。

　俺の視界には、少しずつ、あの幅広の歩道のような細長い「公園」が見えてきた。先週、多くの人が花見に集っていたスペースだ。

　もうすぐだ。

　もうすぐ母が〝花の森〟と出会う。

　そして、三人がカーブを曲がり終えた刹那——、

　里奈と母が足を止め、横に並んだ俺も棒立ちになった。

　母は両手で口を押さえ、驚愕したように目を見開いていた。

　俺もまた「え……」と声を洩らしたまま、呼吸すら忘れたように固まってしまった。

　エ唯一、里奈だけが、目の前に展開した奇跡のような光景を見詰めながら、淋しげに微笑んでいるのだった。

「こ、これって……」

　やっとのことで言葉を発した俺に、里奈は小さく頷いて「うん」と返した。

「桜が、散ったあとが——」

　呆然とした俺が、つぶやき、

「お父さんの本当のメッセージだったんだよ」

　里奈が継いだ。

　その里奈の言葉を隣で聞いていた母が、「ひゅ」と音を立てて息を吸ったと思ったら——、すぐにその息は嗚咽となって吐き出された。

　④母が、泣いた。ついに。

　俺は、そのことにも胸を震わせた。

　あばら家を見ても〝壁のアルバム〟を見ても、写真の裏に書かれたメッセージを見ても、裏庭の花壇を見ても、決して泣かずにいた母の胸のなかで、二〇年ものあいだ強固に積み上げてきた心の壁が、ついに瓦解したのだ。

「これが、花の森、か……」

　誰に　Ⅲ　つぶやいた俺の両目からも、ぽろぽろとしずくがこぼれ出した。

　三人の目の前に広がった斜面の桜は、すっかり散り終えて、まばゆい新緑の丘に変わっていた。

　しかし、散った桜の花の替わりに——、先週、俺が、斜面全体にびっしりと生えたただの雑草だと思っていた下草が、いっせいに花を咲かせていたのだ。

　父が半生をかけてつくり出した〝花の森〟の斜面は、いま、まばゆい薄紫色で埋め尽くされていたのだった。

　里奈は、むせび泣く母の丸まった背中をそっと撫でた。

「よかった。お母さんにも見てもらえて」

　うん、うん、と母は頷きながら泣き続けた。

　紫花菜。

　生前の父が、家の門の手前に作った花壇で毎年咲かせていた花。桑畑村に引っ越したあとも、裏庭に花壇をつくって咲かせていた花。

　俺たちの家族の花。

「こんな、大掛かりで、遠回りなこと、するなんて……」

　俺が潤み声で言うと、里奈が泣き笑いで頷いた。

「ほんとだよね。ちゃんと口にしてくれないと伝わらないよ。お父さん、不器用すぎるよね」

　里奈の言葉に、抑えていた母の泣き声が大きくなった。

　⑤俺は手の甲で涙を拭うと、「はあ……」と深呼吸をした。そして、そうか、そうだったのか、と自分のなかで腑に　Ⅳ　想いを口にした。

「許せないけど、嫌いじゃない——」

「え。なに？」

　頬にしずくを伝わせながら里奈が訊き返す。

「俺が、この二〇年間、ずっと胸のなかで抱えてきた心のもやもやの正体」

「それが——」

「うん」

　父の行動は、許せない。

　でも、父のことは、嫌いじゃない。

　この二つの「一見すると相反する感情」を一括りにしようとすると心中に大きな矛盾が生じて——、結果、俺は苦しみ、盲目になっていたのだ。だから、そんな一括りの感情が「ある」ということにすら気づけず、あるいは認められないまま生きてきてしまった。でも、本当は、＊二律背反するような想いは「ある」し、それを抱いていても「いい」のだ。矛盾を抱えていても構わないし、それは矛盾ではないのかも知れない。そのことに俺は、ようやく気づいたのだった。

「許せないけど、嫌いじゃない——か」

　里奈が、自分に言い聞かせるように復唱した。

「うん……」

　オ頷いた俺は、子供のように泣いている母の背中をそっと押して、近くにあるベンチに座らせた。

（森沢明夫　『桜が散っても』）

（注）

＊　父の「罪」に関する説明を社内で追加いたします。

問一　傍線部ａからｃの語句の本文中における意味として最も適当なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

ａ　うつつを抜かして

１　人生のすべてを打ちこんで　　　　２　多くのお金をつぎ込んで

３　生命力をとられてしまって　　　　４　心を奪われ夢中になって

５　他にはない魅力を感じて

ｂ　順風満帆

１　人生が楽しくて仕方ない様子　　　２　物事が順調に進んでいる様子

３　何の悩みもなく気楽な様子　　　　４　絵に描いたように裕福な様子

５　不必要なことをしない様子

ｃ　嘆息した

１　おどろき呆れた　　　　　　　　　２　決意を固めた

３　いら立ちを抑えた　　　　　　　　４　深呼吸した

５　ため息をついた

易しすぎるとのことで、箇所を「瓦解した」などに変更して作問をお願いします。問六の解答箇所と被るため、ほかに候補があればそちらでお願いします。

問二　空欄　Ⅰ　から　Ⅳ　に入る語句の組み合わせとして最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　Ⅰ　受けた　　Ⅱ　考えもない　　　Ⅲ　でもなく　　Ⅳ　入れた

２　Ⅰ　受けた　　Ⅱ　落ち度もない　　Ⅲ　あてなく　　Ⅳ　下げた

３　Ⅰ　負った　　Ⅱ　いわれもない　　Ⅲ　あてなく　　Ⅳ　落ちた

４　Ⅰ　負った　　Ⅱ　落ち度もない　　Ⅲ　ともなく　　Ⅳ　落ちた

５　Ⅰ　抱いた　　Ⅱ　いわれもない　　Ⅲ　でもなく　　Ⅳ　下げた

６　Ⅰ　抱いた　　Ⅱ　考えもない　　　Ⅲ　ともなく　　Ⅳ　入れた

問三　傍線部①とあるが、「俺」がこのように言う理由として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　自分も妹も、母と同様に父を決して許すことはないが、父の作りあげた桜の光景だけは確かに素晴らしいものだと思ったので、母にも父が作ったということは考えずに、ただ純粋に感動を味わってほしかったから。

２　自分たち家族をないがしろにして父が打ちこんでいたものを厭う気持ちはよくわかるが、これから前を向いて生きていくには父の仕事を総括する必要があり、その上でこれまでの父への思いに決着をつけたかったから。

３　ひょっとしたら母以上に父のことを恨んでいた自分や妹ですら、満開の桜を見た瞬間にそうした否定的な気持ちが雲散霧消したので、母にもその体験で清々しく生まれ変わった気持ちになってほしかったから。

４　父を許す気持ちになれるとは思っていなかったが、大勢の人たちが嬉しそうな顔を見せるほどの桜を作り出したことは認めざるを得ないので、それを見たあとで家族みんなで改めて父の評価を決めたかったから。

５　母と父がずっと仲たがいしたままでいることを、子供として長く気に病んでいたので、父が亡くなった今、母には全てのわだかまりを捨てて父自身や父の生き方を認める気持ちになってほしいと思っていたから。

５が修正前に誤答となっていたため、別の問題（「唯一、里奈だけが、目の前に展開した奇跡のような光景を見詰めながら、淋しげに微笑んでいるのだった」から里奈の心情を読み取る問題）にお願いします。こちらの箇所での作問が難しい場合、新たに正答の作成をお願いします。里奈の心情問題を作成する場合、問八の４は別の箇所にお願いします。

問四　傍線部②について、文法的な説明として正しいものを、次の中から一つ選びなさい。

１　「そして」の品詞は副詞である。

２　「穏やかな」の品詞は形容詞で、活用形は連体形である。

３　「線香の香りを広げて」は三文節六単語から構成されている。

４　「三人」は体言であり、普通名詞に分類される。４を文の成分（主述、修飾・被修飾など）に関する選択肢にお願いします。

５　「包み込んだ」の「だ」は断定を表す助動詞である。

問五　傍線部③について、父の「罪滅ぼしの人生」について「俺」はこの時どのように考えていたか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　父が本当に償うべきは村人たちではなく家族に対してであったのに、罪の意識を抱いた相手を取り違えたまま、他人のために人生を捧げたことが「俺」には不条理に映っており、空回りしていた父の姿勢に対して強い違和感と寂しさを覚えている。

２　罪滅ぼしをしなければならないという強迫観念に取り憑かれ、ありもしない自らの罪にさいなまれて弾劾されることに怯えて暮らし続けた父に憐憫を覚えながら、家族をないがしろにした責任は追及しなければならないと心に誓っている。

３　村人たちだけではなく家族をも犠牲にし、そしてその両方への罪滅ぼしを続けた父の生き方に対し、今はまだ納得できる答えは見つからないものの、信念に殉じ後悔の無い人生を全うしたことを、一つの人生のあり方として尊重したいと考えている。

４　父が行った植樹や村人への施しは、大義名分を掲げつつも、その実自分自身の存在価値を保ち心の均衡を保つための行為であり、「俺」はその不器用な自己肯定欲求を見抜いて、父の行動は尊重しつつも冷静に批判しようとしている。

５　罪の意識など抱く必要のなかった父が、あえて過剰な責任を背負い人生のすべてを手放したことに対して、「俺」はそれを理解を超えた覚悟に裏打ちされた狂気のような行動と捉え、肯定することができずに深い戸惑いを抱いている。

問六　傍線部④について、「母」はこの時、なぜ泣いたのか。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　さまざまな場面で伝えられてきた夫の思いを、二〇年ものあいだ頑なに拒絶し続けていたが、予想もしなかった場面での意表を突くメッセージに心の隙を突かれ、自分の中で押し殺していた夫に対する愛情を閉じ込めておけなくなったから。

２　独善的で家族を不幸にし続けていた夫が、自分では家族への愛情を示しているつもりで最後の最後まで独りよがりな行為に没頭し、自己満足の中で死んでいったことを知って、そんな夫を伴侶に選んでしまった情けなさが頂点に達したから。

３　家族への深い愛情を持ちながらも、それを素直に表現することができない不器用な夫が、死んだあと家族にだけ伝わってほしいという遠回りだが深い愛情表現を残していったのを見て、夫の愛を理解できずに恨んでいた自分を責めたから。

４　家族のことなど全く顧みることなく、自分勝手な生き方だけを押し通したまま死んでいったと思っていた夫が、実は家族のことを思い続けていたということがわかり、これまで抑えてきた夫へのさまざまな感情が一気にこみ上げてきたから。

５　夫の愛情の大きさや深さを初めて思い知り、そんな夫のすばらしさに気づかずに恨み続けた状態のまま死なせてしまった後悔と、もう夫が戻ってこないという喪失感の中、なにもかもなくしてしまったという悲しみでいっぱいになったから。

４「さまざまな感情」が曖昧なため、もう少し具体的に作成すること可能でしょうか。

問七　傍線部⑤とあるが、この時の「俺」の心情として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　半生をかけて父がつくり出した森に、家族に対する愛情を全身全霊を込めて注ぎ込んだであろう家族の花が植えられていたことを知ったことで、自分の中にある感情が父に対する憤りだけではなく、それとは矛盾するとても強い愛情であったことに気付き、その二つに引き裂かれていたから自分は苦しんでいたのだと初めて心から理解できている。

２　父の不器用で遠回りで大掛かりな愛情表現によって、二〇年の間積もり続けた母の恨みが消えうせるのをまのあたりにして、父の人生の壮大さは自分のようなちっぽけな人間にたやすく理解できるはずはなかったのだと納得し、今はただ許せない気持ちを超えた愛情があることを認めて父の愛情を素直に受け取ろうと思っている。

３　自分や妹のような子供よりもずっとつらい思いを、母は父によって味わわされてきたのだろうから、すぐには父のことを見直して認めることはできないだろうと思い、納得はできないが完全に拒否もできないという複雑だが素直な気持ちを言葉にして伝えることで、少しでも母の心に自分たちや父の気持ちが通じてくれれば良いと願っている。

４　母にとっては二〇年もの間、父は自分や子どもたちを不幸にした恨むべき相手でしかなかったのだから、今さら家族思いの善良な人物であったと明かされても納得できず、かえって反発して恨みや憎しみが深くなるのが当然だと認識して、あまり強引に父の本心を理解させようとはせず、ゆっくりと話していくしかないとあきらめている。

５　父が自分たち家族を捨てたような行動を取った二〇年前からつい今しがたまで、父のことを許すことができないという思いと、それと相反する父に対する愛情の存在に思い悩み、わだかまりを抱え続けてきていたが、そうしたつじつまの合わない二つの感情をともに抱いたままでいいのだという理解に到達し、解放されたように感じている。

問八　波線部アからオについて、その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選びなさい。

１　波線部ア「再び眉をハの字にした母は、俺の視線から逃げるように墓石を見下ろしながら言った」には、父が植樹した場所に連れて行きたいという子どもたちからの強い誘いに尻込みし、なんとか断る方法はないかと窮する母の様子が表現されている。

２　波線部イ「ぽつり、ぽつり、と言葉を交わす里奈と母の背中をぼんやりと眺めながら、俺はひとり父の人生を憶っていた」には、話が弾まない母と妹の会話に誘われるのがいやで、他のことに熱中したふりをする「俺」の様子が表現されている。

３　波線部ウ「気づけば、それまで俺たちの頭上を覆っていた樹々の枝が無くなり、周囲が明るくなっていた」には、父の自分たちに対する思いを知った家族の生活が、これまでとは違った明るく幸福なものになるという暗示が表現されている。

４　波線部エ「唯一、里奈だけが、目の前に展開した奇跡のような光景を見詰めながら、淋しげに微笑んでいるのだった」には、母にも兄にも父の本心がわからず、自分一人しか父を理解できなかったという里奈の悲しみが表現されている。

５　波線部オ「頷いた俺は、子供のように泣いている母の背中をそっと押して、近くにあるベンチに座らせた」には、父がこの世を去った今、年老いた母にとって頼みは自分たち兄妹だけだと悟った「俺」の、長男としての決意が表現されている。

問三で里奈の心情読み取り問題を作成する場合、４は別の箇所にお願いします。